

子ども歯医者さん体験で泣いた子どもの対応について  
(スタッフ向け資料)

◎一次対応

- ・診療室から出す（待合室へ）
- ・「(私・僕は) 怖い」と子どもにいわせる
- ・なにが怖かったのかを明らかにする
- ・子どもの怖さを否定しない

一度怖いと思うと気持ちが動揺するので、まずその場から離してください。

その後、できるだけ子供から怖いことを明らかにいわせるようにしてください。

子供への尋ね方として「yes、no」で答えれる効き方はしないで、「怖かった」「◎◎が怖かった」など具体的にいえるような2つ以上の選択をさせる質問の仕方をしてください。

×「怖かった」→「うん」（子どもの口で「怖い」と言っていない）

○「怖かった、それともびっくりした？」→「怖かった」

×「音が怖かった」→「うん」→「怖くないよ～大丈夫だよ！」（話しているのはスタッフだけ）

○「触ったのが怖かった？それとも音が怖かった」→「音が怖かった」→「そうか、怖かったんだね」

解説

例えば、オバケが怖くて夜中にトイレにいけない子ども場合、その怖いオバケの絵を描くことで、オバケが怖くなくなることがあります。漠然としたものほど怖いと感じるものです。怖いと感じる原因を子どもからいうこと・怖さの原因を自分が理解することで、子どもの怖さは軽減されます。このようなときは、まず自分が怖いと感じていることをあきらかにすること、恐怖の対象がなんなのか、子ども自身の中で明らかにすることが大事です。具体的に子どもの口から語るような質問をしてください。（あまりしつこく聞く必要はありません） また、怖いと感じている自分は本当なので、「怖くないよ」といわれると子どもとの信頼関係が崩れます。一次対応では「そうか、怖かったんだね」といって認めてあげてください。一度怖いものを言葉にすれば、後の見学の際に子供なりに怖さの原因をちゃんと考えます。

◎二次対応

- ・参加せず、見学を促す
- ・子どもが落ち着き、興味を示すまで見守る

子どもがあまり動揺しているようなら、ご両親にまかせて落ち着くまで待ってください。その際、待合室を自由に使っていただくようご両親に伝えてください。ちょっとベソをかいているくらいなら「見るだけなら大丈夫かな？」と聞いて見学を促してみてください。見学も断るようなら、その日は待合室で遊んでいるだけで OK です。歯医者さんの診療室から楽しそうな子ども声が聞こえてきた経験だけでも有意義ですので、ご両親にもあせらないよう伝えてください。その際、ご両親に別紙「子ども歯医者さん体験で泣いた子どもについて」を読んで頂くよう伝えてください。ご両親が別紙の通りの対応をしな

ったとしても、ご両親の教育方針を尊重し、こちらの指導法の強制はしないこと。あくまでご両親には理解を求めるという姿勢で臨んでください。

子供が見学をはじめたら、子どもに注視はせず、かつ子どもの変容を逃さず見守ってください。大人から見てなんの変化が無いようでも、子どもは見学しながらちゃんと学んでいきます。一次対応と同じく「怖くないよ」とは絶対に言わないこと。そして、落ち着き始めれば必ずなにかに興味を持ち始めたサインを出しますので、そのサインを見逃さないようにしてください。仮に、興味がアルジネートなようなら他の子どものアルジネートが終わってからアルジネートを持って行って、スタッフ自ら子どもの目の前で触って安全であることを見せてあげてください。他の子どもが終わっていて、目の前でスタッフが触ることで子供なりに安全を確認します。他の子どもが楽しそうにやっていたのを見終えてからすることで「やってみたかったな」という後悔も後押ししてくれます。触ることから初めてください。もし、やらない場合でも無理強いせずスパッとあきらめて次の機会をうかがってください。二次対応で終わっても子供には充分いい体験をしたはずですので、まずスタッフがあせらないこと。

#### ◎三次対応

- ・参加を促す
- ・安全に配慮しつつ、できるだけ好きに触らせる
- ・ユニット担当のドクターと調整役に時間と流れの調整をする

ふれて安全とわかり、恐怖より興味が優先しているようだと判断したら、「あっちでイスをさわってみようか？」と聞いてユニットに行かせてください。「触りたい」と一度思うと、子どもは秒単位で変わっていきますので、その変容に大人が戸惑います。ここでもスタッフが動揺しないこと。ユニット担当スタッフは流れを一次中断し、少しの間だけでも、対象の子どもの好きに触らせてください。ここでは「上手に」やる必要はありませんので、安易にスタッフが手を出さないこと。使い方の説明だけで充分です。その際、テンションが上がっている場合がありますので、子どもの安全にだけは配慮してください。また、スタッフに触れているほうが安心する子どもと、触れていないほうが安心する子どもがいます。前者の場合は、背中などをなでながらなど少しの間寄り添って体験に参加させてください。体験に夢中になって、スタッフがふれなくても大丈夫なようなら徐々に離れてください。受け入れたユニット側のドクターは、ある程度流れに乗せても大丈夫と判断したら、他の参加者の流れに戻してください。全体進行役スタッフは時間の調整を他のユニットの医師に伝えてください。

この時の子どもの変容っぷりは感動します。一人でも多くの子供に楽しい体験を持ち帰ってもらえるようにがんばりましょう。